総説

看護教育における生命倫理トピックの過去 50 年間の文献レビュー
ー学生の死生観に関する調査に焦点を当ててー

松浦　真理*　長谷部　佳子

名寄市立大学保健福祉学部看護学科

【要旨】看護教育において学生が生命倫理にまつわる見識を養い，看護実践に臨むうえでの基準となる自らの死生観を確立させるための取り組みは，在宅医療の推進や国際化に伴い多様な価値観が尊重される近年において，さらに重要性を増していると言える。より効果的・効率的な生命倫理教育を検討していくためには，看護学生が死に対してどのようなイメージを抱き，どのような体験に影響を受けているのかを把握することが大前提となる。そこで，学生の死生観に関する研究論文に焦点を当てながら，生命倫理教育の動向を概説し，講義・演習の在り方について提言を試みた。

キーワード：生命倫理，死生観，尊厳死，安楽死，看護教育

I.　はじめに

昭和 26 年（1951 年）の保健師助産師看護師法改正に伴い，教育内容について指定規則に伴った改正を実施した。厚生労働省等の看護行政の足跡第 3 部によると，この改正が現在の指定規則の原型になっている [1)]。この当時の教科書には看護倫理として，主に看護の精神性について述べられていた。

1970 年代に入って間もなく，国外で臓器移植が行われた。日本国内において札幌医科大学で心臓移植が行われたのもこのころである。その際，医師は刑法により処分されることとなった。その後，臓器移植にまつわる課題の一つとして, 死に関する捉え方, 特に尊厳死の取り扱いが明らかになった。この尊厳死について，臓器提供を行おうとする意思決定を尊重する風潮を受けて，死に逝く人がかけがえのないいのちを自分の意思で終えることへの是非に関して活発な議論がなされた結果, 日本では 1997 年臓器移植に関する法律が施行，2010 年臓器移植に関する法律が改正された。

1990 年代から行われている死生観にまつわる課題は 2010 年代に入るころから多様になり, 脳死・臓器移植，安楽死，尊厳死，そして遺伝子操作についても検討の範囲を広げた。これに伴い，看護学生を対象に教育する死生観も変化した [2)～9)]。風岡 [10)] は，看護学生が死生観を形成する上で死をどのような内容に視座を置いているのかを調査したが，その結果からは，近親者や受け持ち対象者などの死を経験したことが契機になることが明らかになった。

看護教育において学生に生命倫理にまつわる見識を養わせ，死生観の確立を促すための取り組みは，現在の医療体制を踏まえると重要性が増している。そこで，さらに効果的な講義や演習，実習を行うための示唆を得ることを目的として，文献検討を試みた。

II.　研究方法

1.　文献収集方法

検索データベースは医学中央雑誌 Web 版を利用した。この理由は，医学中央雑誌が 1970 年代から看護学や医学に関する論文を網羅していることによる。また，科学研究費助成事業のデータベースでは，今回の調査目的に適う論文を多く得ることはできなかった。そこで，医学中央雑誌 Web 版に限定する代わりに，複数のキーワードを利用して広範に検索することで，多くの論文を集約できるように努めた。

文献検索時のキーワードは「安楽死 or 尊厳死」「安楽死 and 看護」「尊厳死 and 看護」「看護学生 and 死」として，原著論文のみを抽出するようにした。キーワードを「生命倫理」として検索すると，ごく少数の論文しか検索できないため，上述のキーワードの掛け合わせによる検索方法を採った。さら

2022 年 10 月 12 日受付：2022 年 12 月 6 日受理

＊責任著者　松浦　真理
住所　〒096-8641　北海道名寄市西４条北８丁目１
E-mail：m.matsuura@nayoro.ac.jp

に死に関するテーマを扱う学術雑誌7種（死の臨床，臨床死生学，日本脳死・脳蘇生学会誌，日本臨床死生学会プログラム・抄録集，日本サイコオンコロジー学会総会・日本臨床死生学会総会合同会プログラム・抄録集，生老病死の行動学，死生学年報）についても検索して，看護学生を対象にした原著論文も抽出するようにした。

2. 分析方法

上記の検索を通じて1970年以降2022年3月までに発表されている論文は2,451編であった。重複を削除しながら看護学生を対象にした調査に限定したところ，96編の論文に絞ることができた。この96編を経年的に総括した。

III. 結果

1. 看護学における倫理教育の変遷

1980年以前の看護倫理における教授内容は，看護者としての姿勢や態度に関する講義だった[11]。そのほか，礼儀や作法，看護師としての責任について理解を促す内容だった。業務規準としては，診療の補助や療養上の世話を行う上での手順や法則をまとめたものが示され，特に看護上の課題として取り上げられてきたものには，患者の人権を守るものや，看護職として職業上問題となってきた判例に対する対処行動が提示されていた。不適切な行為や行動を実践してはいけないということを教えてきたのである。

1986年に医師法の改正が行われ，医療計画の導入や必要病床数が定められた。そのため，従前の看護教育に改変を加える必要が生じた。看護過誤などの判断ミスが起こらないように看護業務への理解を高めることが課題とされた一方で，死生観を課題とした研究が行われ始めた[12]。

伊藤[11]によると，石井は，看護倫理は「生命倫理と職業倫理すべてを含んだもの」，サラT．フライらによると「看護実践に見いだされる道徳的現象」と述べている。看護倫理とは特に看護実践を行うために必要な看護上の規範であった。

中村[13]は，看護学生の死生観を育成する上で重要な体験となる患者の死に対して，どういった心の準備をして臨み，臨終に向き合うのかについて研究を行い，教育課程で学んだ臨死経験と死生観の融合過程が検討された。このころから，看護教育に医療計画などの医学的視点が含まれるようになり，看護倫理において取り扱うべき内容は広がった。そのため，死に対する教育においても，学生が患者の死をどのように考えているのかを調査する研究が多くなった[14)～19]。死生への向き合い方や，さらには安楽死や尊厳死の問題と向き合うようになった[20) 21]。

1997年，日本でも臓器移植に関する法律が施行され，この時に，今までの看護倫理学では取り入れてこなかった生命倫理という枠組みが構築されたほか，「生と死をめぐる諸問題」，「インフォームドコンセント」，「患者の権利」の3つのカテゴリーを包含するようになった。

2000 年代に入り尊厳死や安楽死について検討することが増えた[10)，22)～31]。

2. 看護学教育で取り上げられてきた生命倫理トピック

1）脳死と臓器移植について

1990年代に入り医学は飛躍的に進歩した。このころから看護学生を対象に脳死と臓器移植に関する意識調査が行われはじめ[32) 33]，2000年代には，メディアリテラシーの影響を受けた看護学生を対象に，脳死にまつわる生死の操作に関する意識調査が行われるようになった[34]。1900年代後半から2000年代前半までの5年間，脳死の容認や臓器提供に対する関心やコンサンセスついても調査が行われた[35) 36]。

2）終末期ケアについて

1980年代は，主に末期患者の身体的ケア内容に焦点を当てた研究が行われた[16]。1990年代に行われた看護研究では，終末期における患者と看護学生の関係性から，死生観は経験的に構築することが述べられた[37]。2000年代に入り，終末期実習において患者との関わりを通し，看護学生が患者の苦痛と向き合い，死を捉えることによって，実習前・中・後の時間を経て，どのように死生観が形成されるのかについて調査された[38) 39]。終末期患者との関わりを通して得られる死生観は，死別経験や学年による変化がないことから，受動的に形成されるものではないとされ[20) 31) 39]，2000年代後半から2010年代には，能動的に死を見つめる態度の形成について検討された[40)～42]。さらに，死を意識することを学んだことで，看護を深く捉え，患者に対する意識に変化が生じたことが報告された[43) 44]。死を理解することで生命倫理について考える機会となり，身体的苦痛を軽減する支援を構想し，死に逝く人が，何を思い，何を感じているのかについて考察されるようになった[45)～50]。看護学実習における終末期患者のケアを通して，学生が感じている不安とともに，患者に対するケア

の難しさが分析された[41]。特にこの時代，生命の質を向上させる上での QOL を課題とした看護教育が定着したことから, 長寿と共に人生の質をテーマに, 尊厳死に関する検討が行われた[6) 51)]。

3）安楽死について

1990 年代，東海大学病院での安楽死事件を題材に, 看護学生の安楽死に対する価値観が調査された[52]。この当時，安楽死は医療問題であった。ところが, 2010 年代に入ると，安楽死は尊厳ある死と意識づけられ始め，人生の終末における意識調査を通し，死に対する考え方について検討された[4) 7)]。高校生や看護学生を対象とした研究では，人がどう生き，どう死ぬのかを考え，人生の最期について議論され，終末期患者を目の前にした時の焦りや自らの力量の無さを受け止め，患者への配慮不足を見つめなおしたことが報告された[9) 53)]。さらに，臨地実習や終末期看護による学びの経験から，解放としての死に対する価値観は有意差を示したことが報告された[54]。

4）尊厳死について

2000 年代に入り，看護学において脳死・臓器移植との関係性の中で尊厳死に関する研究が始まり[21) 31) 55)]，2010 年に入り，患者の死と向き合い，人の死を看取る側の死生観について検討された[56]。

5）遺伝子診断について

2010 年代に入ると，遺伝子診断によって出生前検査が行われるようになり，障害の有無を事前に知ることが可能となった。しかし，その一方でいのちの選別に対する意思決定を承認することが問題視されるようになった[3]。

3．学生の死生観形成に関する研究の概要

1）死別体験に関連づけた研究

（1）患者の死を含む臨床実習にまつわるもの

1970 年代に入り，患者の死に対する看護教育によって，死に逝く患者が抱える苦悩を支える看護ケアについて検討されるようになった[14]。2000 年代になると, 看護学生を対象に死生観研究が行われはじめ, 患者の死や家族の死は，看護学生の死に対する態度に大きく影響することが明らかになった[57]。終末期において，患者の身体機能をアセスメントせず，過剰な医療行為を行うことは，かえって患者を苦しめているとされ，2010 年代に入り，かつての終末期医療を見直し，生命を重んじた新たな価値観の一つとして尊厳死に対する意識が高まり，看護学生を対象に，終末期医療において，患者の心理と立場に思いを巡らせることに焦点を当てた研究が行われた[58]。

（2）家族の死にまつわるもの

1990 年代に入ると，死生観に影響を与える体験について調査され，身近な人の死の経験は深い悲嘆反応を示し，生前の生きざまや，いのちの終わりを感じる体験から，死生観を養う傾向にあることが報告された[59) 60)]。2010 年代に入ると，身近な人の死を通して現実と直面し，生と死を考える機会になることが取り上げられ，学生の死生観構築に役立つ教育的アプローチの方法と内容が検討された[61]。

2）生命倫理に関する講義等の効果を評価した研究

1990 年代に入ると，看護学生に対する死生観教育が取り上げられるようになり，安楽死に関する是非を検討した研究が報告された[13) 62)]。2000 年代に入ると，生きることに対する共感性について調査され[10) 63) ~65)]，2010 年代には，終末期患者に向き合い，最期の時を支えるケアを行う看護者としての資質が問われ，死生観が形成されていく過程について調査された[3) 8) 66)]。さらに，「遺伝子診断」「羊水検査」「臓器移植と脳死」など，目の前に存在する人以外の生命倫理について調査が行われた[3]。2020 年代，死生に関する講義や演習による実践経験を通して死生観が構築されることが報告された[53) 67)]。

3）死のイメージを調査した研究

死生観尺度としては，1969 年には Collet&Lester が Fear of Death Scale（FDS）を，1970 年には Templer が Death Anxiety Scale（DAS）を，1979 年には Hoelter により Multidimensional Fear of Death Scale が開発された[68]。1997 年には Wong が Death Attitude Profile-Revised を，1999 年には丹下智香子による死に対する態度尺度が開発された[68]。1990 年代に行われた看護大学の学生や看護学生を対象にした死生観研究において，死をイメージすることで死を肯定的に捉えられるようになったことが報告された[13]。2000 年代入ると，死生観研究はさらに深まり，死をイメージしたことで，生命を重んじた価値観の育成に結びつき，死を肯定的に受け止められたことが報告された[69) ~72)]。

平井啓は，2000 年に死生観尺度を，2001 年には末期患者の死生観尺度を開発した[68]。看護学生の職業的同一性と死に対する態度の関係性について調査された内容から，看護学生は経年性において患者の生を重んじた死生観を育成することが報告され，患者の死を経験したことは，死生観の育成に影響していることが報告された[19]。死生観尺度を用いた看護研究によると，死に対する不安感情は，悲観的価値観

に移行することを踏まえた中で，死は生の延長上にあることを理解するための感情の統制につながることについて研究された結果，死を受け止めようとする意識が育成されたことが報告された[28) 41) 71) 73) ~77)]。講義を受講することで，死に対する観念を形成し，望ましい死が迎えられるよう支援する看護師としての意識と自覚が，看護者としての課題であることが取り上げられた[31)]。死生観研究が始まり30年ほどが経過した2000年代後半には，死生観の育成によって，正しい価値判断に基づいた看護ができるようになることが示唆された[68)]。2010年代に入ると，延命医療，脳死・臓器移植，生命倫理および安楽死など，死に対する判断と直面した中で死生観を検討したところ，死に対する恐怖と不安を乗り越えることはできないことが明らかにされた[5) 47) ~49)]。こうした中，生命倫理について学ぶ中で感じたジレンマや，安楽死の容認，尊厳死に対する延命医療の是非を問われる中での葛藤が報告された[8)]。さらに，看護大学生における職業アイデンティティとして，死生観を育成する重要性が示唆された[78)]。2020年代に入り，尊厳ある生命の問題としての安楽死について地域住民と看護学生に対する調査が行われ，いのちの尊さを実感したことが報告された[79)]。

（1）学年による違いはあるのか

1980年代から，看護学生を対象に死に対するイメージが調査された[17)]。死に対する態度の分析を通じて，学生達が能動的にイメージしていることが明らかになりつつあることが示された[23)]。幼いころは，死を再現する。しかし，入学して1年以内の看護学生が，終末期にある患者・家族に戸惑いを感じながらも，看護師や教員の支えがあれば，看護ケアを通して死に逝く患者の死を受け止めることができたことが報告された[39) 45)]。2000年代に入り，学年差異とともに死への準備教育を通して死生観が育成されることが報告された[80)]。

（2）養成施設による差異

2000年代に入り，学生が死を学び，死に対する態度を育成するための教育的指導と教授内容について分析された[81) 82)]。大学生の学びの要点は，脳死を判定する基準であった[83)]。看護学生は，死ぬまでにできることを叶えるなど，患者の希望に寄り添う傾向があり[7) 84)]，高等学校5年一貫校専攻科で学ぶ看護学生と短期大学看護学生は倫理的根拠がない中で，生のあきらめとして死を捉える傾向が報告された[9) 85)]。

（3）看護学生と他学科学生や職種，国籍での違いはあるのか

1990年代後半に看護学生と他分野の学生を対象に，死に関するイメージについてアンケート調査が行われた（2000年に発表）[86)]。看護学生と他分野の大学生および短期大学生を対象にしたアンケート調査では，看護学生は他分野の学生と比べると，他者の死について考えることが少ないことが報告された[86)]。看護学生と医学生を比較すると，看護学生の方が死に対して関心があり，その理由の一つとして，授業や実習の影響が大きいことが報告された[87) ~90)]。

2000年代には，国境を越えた研究において生と死に対する意識や死生観を通した看護観について研究が行われた。グローバル化に伴い，日本と他国の死生観を比較したところ，日本は生と死を重んじた尊厳があり，アジア諸国は，日本に比べ死を抽象的に捉え，来世を信じている傾向があることが述べられていた[91) ~93)]。

IV. 考察

1. 生命倫理の経年的特徴

日本では，1961年国民皆保険が開始となり，1973年，70歳以上の医療費が無料となり，多くの国民が医療を受けられるようになった。こうした制度の整備により，病院で死を迎える時代となった。1980年，日本国内において角膜移植に関する法律が制定され，看護教育において安楽死に関する研究が行われた。1990年，日本国内において臓器移植に関する法律が制定され，かつての看護指針に加え，安楽死や脳死・臓器移植に関する研究が行われるようになり，2000年代に入ると，脳死・臓器移植に関するもの，尊厳死に関するもの，生命倫理に関する研究が進んだ。生命倫理に関するものとしては，主に倫理的価値判断について調査された。さらに，医学的知見と共に医療倫理としての看護倫理が構造化された。こうした看護倫理の確立が，緩和医療の発展に結びついたと考える。

2. 看護教育における死生観の形成を促す教育の必要性

看護は，人間関係の構築が必要である。患者一人一人の人生のヒストリーを理解しながら，看護実践を通して看護を展開する。これまでの看護教育では，死に逝く人が，かつてどんな生活をし，どんな生き方をしてきたのかを考えながら，その人生を尊重し

た看護を実践してきた。死に対する悲壮や苦痛は患者にとって大きな苦悩である。死を間近にした患者が抱える身体的苦痛に対する適切な医療を提供し，心理的苦痛を理解したサポートを行うことは，死生観構築と共に，健康問題の性質に対する適切な看護が行われるよう，医療従事者が学習するべきことである。人はいつか死を迎える存在である。人がいずれ死を迎えることを実感することで，生きた人への看護目標が生まれるのではないかと考える。

3．看護教育における生命倫理の取り扱いに対する提言

看護において，死を迎える患者に，看護過程の展開を通し，身体的・精神的・社会的・文化的・霊的課題を解決することは重要なことである。霊的ケアはスピリチュアルケアともいわれ，生命の価値を重んじ，人間として生きていることを尊重された中で，安堵の中に過ごすことである。

死を宣告された患者は，死を宣告されたその瞬間から，死と向き合っていくことから逃れられない。看護師および看護教育者は，患者が感じている死に対する恐怖を主観的に捉え，その不安を正確に聞き取り，看護上の課題を解決することが求められる。看護上の課題を解決する上での死生観の育成として，様々な人格的特性のある看護学生が，正しい価値判断ができるよう指導することであると考える。

科学の発展が生んだ生命コントロールにまつわる医療課題に対して検討することは，医療者としての重要な課題であると考える。

文　献

1）厚生労働省等の看護行政の足跡　第3部：看護師助産師保健師法60年史. http://www.nurse.or.jp, 2009. 2022. 9. 1閲覧.
2）真部昌子，小濱優子，赤坂憲子，岩倉孝明：脳死・臓器移植に対する看護学生の意識　2003年と2002年・1992年の調査結果を比較して．臨床死生学，10（1）：52-60，2005.
3）岩間淳子，松本佳子：生命倫理問題に対する大学生の意見　看護学科の学生を対象に．川崎市立看護短期大学紀要，19（1）：39-48，2014.
4）今野修，檜原登志子：高齢者に係わる医療・福祉職の倫理教育方法の検討（その2）新聞記事を活用したグループ討議における医療的ケアの倫理教育方法に関する検討. Quality of Life Journal, 15（1）: 63-78, 2014.
5）檜原登志子，今野修：高齢者に係わる医療・福祉職の倫理教育方法に関する検討（その1）新聞記事活用による「倫理的問題意識」の学習を試みて. Quality of Life Journal，15（1）：51-61，2014.
6）吉田美穂，岡本さゆり，山本智恵子，石田実知子，小野晴子，土井英子：卒業前看護学生の道徳性発達段階ケアの倫理と正義の倫理の論争に伴うジレンマストーリーを用いて．岡山県看護教育研究会誌，39（1）：7-13，2015.
7）原広美：看護学生の死生観と望ましい死および学習経験との関連．神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録　教員・教育担当者養成課程看護コース，40：47-54，2015.
8）川久保和子，宮武陽子，中村史江，佐藤栄子，青山みどり：脳死・臓器移植の授業における看護学生の学び．足利短期大学研究紀要，36（1）：27-34，2016.
9）安田幸子，上田伊佐子，森田敏子：高等学校5年一貫校専攻科で学ぶ看護学生の看護倫理に関する思考の特徴からみた倫理教育の課題．徳島文理大学研究紀要，95：15-28，2018.
10）風岡たま代，伊藤ふみ子，川守田千秋：看護教育による看護学生の死生観と共感性の変化に関する一考察．日本看護学教育学会誌，17（1）：19-27，2007.
11）伊藤千晴，太田勝正：教科書からみた戦後の看護倫理教育内容の変遷．日本看護学教育学会誌，17（1）：29-40，2007.
12）田中愛子，岩本晋：看護学生の死生観のとらえかたとその実態　学生の作成した質問紙を中心に．山口県立大学看護学部紀要，2：31-47，1998.
13）中村真理子：看護基礎教育における死への準備教育の意義　看護学生の死に対するイメージの変化から．東海大学短期大学紀要，24：137-147，1991.
14）遠藤千恵子，島内節，岡崎節子：看護教育における患者の死に関する研究（第1報）看護学生の死に対する考え方. 神奈川県立衛生短期大学紀要, 4 : 7-17, 1972.
15）鶴田フサエ，前田博子，岡下秀子：安楽死に対する看護学生の態度レポートおよび調査による一考察．看護実践の科学，6（3）：55-61，1981.
16）菊地登喜子，小代聖香，近沢範子：死のイメージとその関連要因についての因子分析　看護学生を対象とした質問紙調査による研究. 看護展望, 11（6）: 594-604, 1986.
17）藤井博英，猪股洋子，越前屋良子，宮越不二子，佐々木真紀子，辻宏子，福田幸子：秋田県の看護学生の死のイメージに関する考察　2年課程と3年課程の差異を中心として．看護教育，30（2）：105-109，1989.
18）宮崎昌子：大学生の特性と死に対する意識との関連性．聖隷学園浜松衛生短期大学紀要，14：102-110，1991.
19）川守田千秋，風岡たま代：看護学生の職業的同一性と死に対する態度の関係　2年課程の学生を対象として．神奈川県立衛生短期大学紀要，36：7-12，2004.
20）糸島陽子：死生観形成に関する調査　看護学生と大学生の比較．京都市立看護短期大学紀要，30：141-147，2005.
21）江口民，大石恵子，片山久美子，小山理会，酒巻佳菜子，佐々木美緒，高橋侑子，飛田絵梨，早川有紀，細河枝里：現代人の望む死の状況　2002年看護学科1年生の絵と大学祭における市民の調査票より．東邦大学医学部看護学科　東邦大学医療短期大学紀要，18：68-76，2005.
22）鹿村眞理子：看護学生の死のイメージと「あの世」観．日本看護学会論文集　看護教育，36：99-101，2005.
23）堀内宏美，奥祥子，中俣直美，塚本康子，牛尾禮子：看護大学生の死についての態度構造の縦断的研究．福岡県立大学看護学部紀要，3（2）：65-73，2006.
24）臼杵百合子，松村惠子：働きながら看護学を学修している学生の死生観　死生観尺度における因子構造からの分析．日本看護学会論文集　看護総合，37：107-109，2006.
25）羽馬由恵：看護学生の死生観とその要因分析の検討．奈良県立三室病院看護学雑誌，22：104-107，2006.

26) 田代隆良，永田奏，出田順子，安藤悦子：看護学生の死生観の学年間比較．保健学研究，19（1）：43-48，2006.
27) 石田順子，石田和子，神田清子：看護学生の死生観に関する研究．桐生短期大学紀要，18：109-115，2007.
28) 園田麻利子，上原充世：ターミナルケアの授業における学生の死生観に関する検討．鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要，11：21-35，2007.
29) 前澤美代子，仲沢富枝：看護学生の死生観の育成．山梨県立看護大学短期大学部紀要，12（1）：1-14，2007.
30) 石田美知：看護学生の死生観構築を目指した教育方法及び内容の検討．日本看護医療学会雑誌，10（2）：20-28，2008.
31) 土屋八千代，緒方昭子，内田倫子，山田美由紀：死生観を培う授業展開を目指して　自分が迎えたい「死」を軸にした援助を．日本看護学会論文集　看護教育，38：3-5，2008.
32) 近藤裕子，原田江梨子，多田昭栄：高校生の脳死と臓器移植に関する意識調査　本短期大学部看護学科受験生と看護学生の比較から．徳島大学医療技術短期大学部紀要，2：135-142，1992.
33) 真部昌子，小浜優子，常盤洋子：ケアする立場から〝脳死〟をどのように考えるか　看護学生の意識調査から．Brain Nursing，8（5）：443-449，1992.
34) 荒木玲子：「脳死による臓器移植」に関する意識調査メディア・リテラシーの視点による考察．足利短期大学研究紀要，24（1）：45-49，2004.
35) 近藤裕子，南妙子：5年前と現在の看護学生の脳死者からの臓器移植に関する意識の変化．日本看護学会論文集　看護総合，36：499-501，2005.
36) 月田佳寿美，池田歩未，藤井和代：看護学生の死生観に影響する要因と脳死の捉え方．福井大学医学部研究雑誌，7（1-2）：7-13，2006.
37) 中山利子，柳川育子，谷口尚樹：看護学生の死生意識と終末期実習に関する1考察．京都市立看護短期大学紀要，18：117-122，1993.
38) 玉川緑：終末期患者との関わりにおける看護学生の死生観形成過程．日本看護学会論文集　看護総合，36：511-513，2005.
39) 加藤和子，百瀬由美子：看護学教育における看護学生の死生観に関する研究．愛知県立大学看護学部紀要，15：79-86，2009.
40) 鹿村眞理子：看護学生の死に対する感情とイメージに関する文献レビュー．ヘルスサイエンス研究，12（1）：3-13，2008.
41) 鹿村眞理子：看護学生の「死に対する態度」と影響要因．ヘルスサイエンス研究，14（1）：27-34，2010.
42) 鹿村眞理子：看護学生の「死の認知」の構造．ヘルスサイエンス研究，15（1）：23-32，2011.
43) 菊池和子：看護学生の死生観 Purpose-in-Life Test の分析より．岩手県立大学看護学部紀要，2：91-98，2000.
44) 狩谷恭子，渡會丹和子：看護大学生における死生観と死に対するイメージの学年比較．医療保健学研究，2：107-116，2011.
45) 上田稚代子，上田伊津代，畑野富美，住田陽子，山口昌子，坂本由希子，池田敬子，辻あさみ，鈴木幸子：看護学生の緩和ケア病棟における実習での学び　死生観・看護観のレポートからの分析．関西医療大学紀要，6：51-58，2012.
46) 山元恵子，守田嘉男，平松正臣，籔脇健司，深津孝雄，山口浩：看護大学生を対象とした Purpose In Life Test による死についての意識調査．梅花女子大学看護学部紀要，12（3）：59-69，2013.
47) 内山久美，久木原博子，二重作清子，浅田有希，原理恵：看護大学生の臨地実習前の死生観．看護・保健科学研究誌，13（1）：104-113，2013.
48) 久木原博子，浅田有希，原理恵，内山久美，田村美子，馬場保子：女子看護学生における死生観と終末期医療に関する認識の学年比較．日本看護福祉学会誌，19（2）：133-141，2014.
49) 久木原博子，内山久美，浅田有希，原理恵，馬場保子，中島史子：女子看護学生の終末期医療に対する認識と死生観との関係．日本看護学会論文集　看護総合，44：189-192，2014.
50) 岡本理沙，藤原未奈，柳佳織，荒井葉子，齋藤智江，蔦典子，福井正康：看護大学生の抱く死生観と看取りケアの関連性．看護・保健科学研究誌，15（1）：135-143，2014.
51) 眞鍋知子，天谷尚子，陳俊霞，山下菜穂子：看護学生と社会人の死生観の比較．了徳寺大学研究紀要，11：87-96，2017.
52) 上野正彦：看護学生は安楽死 euthanasia をこう考えている東海大病院〝安楽死〟事件を自分自身の問題としてとらえて．看護教育，34（2）：122-127，1993.
53) 長谷川幹子，安福真弓，重年清香，阿部真幸，板東正己，道廣睦子：看護系大学4年生の死生観に影響する要因に関する研究．インターナショナル Nursing Care Research，19（1）：137-145，2020.
54) 馬場彩佳，竹見八代子：看護学生における死生観と終末期看護に対する考え．日本看護・教育・福祉学研究，3（1）：39-47，2020.
55) 大山由紀子，沖野良枝：看護職と看護学生の死生観の傾向に関する比較研究．日本看護学会論文集　看護総合，34：75-77，2003.
56) 菅原千恵子：看護学生の「死生観」と「死生観の育成」についての文献検討．臨床死生学，22（1）：122-130，2017.
57) 奥祥子，塚本康子，堀内宏美，日浦瑞枝，中俣直美，牛尾禮子：看護学生の死についての態度構造．鹿児島大学医学部保健学科紀要，14：13-19，2004.
58) 園田麻利子，上原充世：看護学生の「生と死」に対しての考え方の推移．鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要，16：13-21，2012
59) 中村真理子：死への準備教育としての祖父母の死　看護学生のレポート分析から．日本看護学会集録23回看護教育，163-166，1992.
60) 平田ナツ子，横川正子：看護学生の死に関する認識調査　基礎看護教育における死への準備．聖マリア学院紀要，14：105-108，1999.
61) 山下恵子，赤沢昌子：学生の死生観の状況と看護・介護学生間の比較．松本短期大学研究紀要，19：73-80，2010.
62) 小林邦子，落合秀香：看護基礎教育における生命倫理安楽死の模擬裁判を用いて．看護教育の研究，16：197-198，1999.
63) 新見明子:看護学生の死生観　Purpose in Life Test 分析より．川崎医療短期大学紀要，22：25-30，2002.
64) 落合清子，長井美佐子：看護学生の「死のイメージ」の変化　読書による死生観確立への影響について．聖隷クリストファー大学看護短期大学部紀要，27：7-13，2005.
65) 宍戸路佳，岡部惠子：尊厳死に対する看護学生の思い視聴覚教育を通じた学生の学びの分析．埼玉医科大学看護学科紀要，1（1）：43-49，2008.
66) 山田多加，伊藤睦美，本郷千草，浦田由希子，南江静代，島田美紀，中村美保，河合真紀子：終末期にある患者を受け持った看護学生の死生観に関係する実習

での経験. 日本看護学会論文集　看護教育, 42 : 49-52, 2012.
67) 長尾匡子，山本裕子 : 高齢者の終末期医療や老衰死についての看護学生の認識. 老年看護学, 25（1）: 132-138, 2020.
68) 風岡たま代，伊藤ふみ子 : 看護教育による看護学生の死生観に関する本邦過去 35 年間の研究の概観．横浜創英短期大学紀要，4 : 1-11，2008.
69) 岡田まり，片岡智子，吉岡多美子，大西和子，樋廻博重, 吉岡一実 : 看護学生の死のイメージに関する研究. 三重看護学誌，3（1）: 53-59，2000.
70) 古賀万美子 : 看護学生の死生観　死生観形成過程における看護学生の認識．神奈川県立看護教育学校看護教育研究集録，25 : 52-59，2000.
71) 竹下美恵子，魚住郁子，渡辺弥生，伊藤豊美，近藤里美，寺田美恵子，濱口高子，今井範子 : 看護学生の死生観に関する研究（第 3 報）領域別臨地実習前後の比較. 日本看護学会論文集　看護総合, 32 : 76-78, 2001.
72) 戸井間充子，大嶋満須美，田中愛子 : 看護学生の死生観　レポート「あと半年の命であったら…」の分析より．ナースエデュケイション，4（5）: 139-146，2003.
73) 風岡たま代，川守田千秋 : 看護学生の死生観の学年変化に関する一考察　丹下の「死に対する態度尺度」を用いて．聖隷クリストファー大学看護学部紀要，14 : 25-36，2006.
74) 佐野望，武田美和，真部昌子，安藤幸枝 : 新設短期大学看護学科 1 期生と 2 期生の卒業前における医療に関連した関心事項の相違．日本看護学会論文集　看護教育 39 号，223-225，2009.
75) 花子紀子，隈部直子，梶原身和子，加藤かすみ : 緩和ケア病棟実習前後の看護学生の死生観の変化　看護学生の語りの分析．日本看護学会論文集　看護教育，42 : 42-45，2012.
76) 岩下葉月，吉岡さおり : 終末期ケアに対する看護学生の態度と影響する要因．広島国際大学看護学ジャーナル，9（1）: 35-44，2012.
77) 早坂寿美 : 看護学生の死生観と他者意識　臨地実習前後の比較．北海道文教大学研究紀要，36 : 165-172，2012.
78) 道廣睦子，安福真弓，長谷川幹子，重年清香，阿部真幸，板東正巳 : 看護大学 4 年生の死生観と職業的アイデンティティの関連．インターナショナル Nursing Care Research，18（4）: 1-11，2019.
79) 永石喜代子，佐々木秀美，前信由美，田村和恵，岩本由美，武智朋子，長岡孝典，岡本陽子，上野正彦 : 尊厳ある生命の問題としての安楽死に関する研究．看護学統合研究，21（2）: 1-14，2020.
80) 豊田妙子，斉藤好子 : 看護学生の死に対する認識変化の要因．三重看護学誌，3（1）: 147-154，2000.
81) 原田真澄，堀容子，高須美香，東野督子，安藤詳子 : 看護学生の死に対する態度に関連する要因　死のイメージ　性格・死の経験との関連から．日本看護医療学会雑誌，7（2）: 17-26，2005.
82) 糸島陽子，植村小夜子，二村有香，門脇徳子 : 看護学生の死生観と終末期看護への関心．日本看護学会論文集　看護教育，37 : 392-394，2007.
83) 高橋由紀，南妙子，近藤美月，岩本真紀，近藤裕子 : 脳死と臓器移植に関する意識調査　1991 年看護短大生と 1999 年看護大学生の意識の比較から．香川医科大学看護学雑誌，4（1）: 9-16，2000.
84) 瀧川薫，田中智美 : 大学生の死生観形成について　看護学生と他学部生との比較. 滋賀医科大学看護学ジャーナル，10（1）: 16-21，2012.
85) 砂賀道子，鈴木はるみ，佐藤幸子，澁谷貞子 : 短期大学看護学生における死に対する態度　学年別による比較．桐生短期大学紀要，16 : 43-48，2005.
86) 一色康子，河野政子 : 看護学生と他分野学生の死のイメージに関する調査研究　調査項目の所属間の比較による検討．看護学統合研究，2（1）: 57-61，2000.
87) 久木原博子，内山久美，浅田有希，原理恵，小川るみ : 看護学生と医療系学生の死生観比較. インターナショナル Nursing Care Research，12（3）: 93-99，2013.
88) 梅田尚子，迫田智子 : 終末期看護の授業と実習が看護学生の死生観に及ぼす影響．日本看護学会論文集　看護教育 44 号，34-37，2014.
89) 加藤さゆり，横島啓子，徳重あつ子，久山かおる : 地域高齢者への死生観インタビューによる 2 年課程定時制に通う看護学生の高齢者の死生観の理解と活用．武庫川女子大学看護学ジャーナル，4 : 77-87，2019.
90) Tanaka A : An analysis of nursing students' death concern. 山口県立大学看護学部紀要，4 : 58-63，2000.
91) 道廣睦子，土井さやこ，橋本和子，中桐佐智子 : アジアの看護大学生の生と死に対する意識の比較　日本・中国・韓国の比較．インターナショナル Nursing Care Research，3（1）: 27-35，2004.
92) 道廣睦子，岡須美恵，橋本和子，安東勝弘，安福真弓，名越恵美 : 日本と韓国の看護大学生の生と死に対する意識の比較．看護・保健科学研究誌，4（1）: 13-21，2004.
93) 田代隆良，出田順子，永田奏，安藤悦子，崔鎔赫，　白明和 : 日韓看護学生の死生観の比較．保健学研究，19（1）: 49-54，2006.

Review article

Literature Review for Past 50 Years of Bioethics Topics in Nursing Education

- Focusing on Studies into the Students' Views on Life and Death-

Mari MATSUURA* , Yoshiko HASEBE

Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare Science, Nayoro City University

***Abstract*:** Initiatives in nursing education aimed at helping students acquire insight into bioethics as well as develop their own principled views on life and death for approaching nursing practice can be said to have become even more important in recent years, during which diverse values have come to be respected following advancements in home-based medical care and internationalization. To consider more effective and efficient education on bioethics, having an understanding of what kinds of feelings nursing students have towards death and what types of experience they are influenced by is a major premise of the study. Therefore, while maintaining a focus on research papers into students' views on life and death, we have attempted to outline trends in bioethics education and make recommendations regarding how best to provide lectures and practical exercises in such education.

***Key words*: Bioethics, views on life and death, death with dignity, euthanasia, nursing education**